

第8章 発掘調査の成果

1 調査の概要

平城跡は、江戸時代の磐城平藩の城郭跡である周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。その範囲は、本丸・二ノ丸・三ノ丸などの曲輪群や上級家臣の屋敷地だけではなく、外堀内の侍屋敷や西側の寺社地域までを含んでいる。所在地でみると、いわき市平字^{きゅうじょうせき}旧城跡・^{たち}字田町・^{さいづちこうじ}字搔槌小路・^{すぎだいら}字杉平・^{さくらまち}字桜町・^{あげつち}字揚土・^{ろくにんちょう}字六人町・^{たかつき}字高月・^{どうしょうこう}字道匠小路・^{はちまんこうじ}字八幡小路・^{ふるかじまち}字古鍛冶町地内の広範囲にわたる。さらに、旧城跡遺跡・桜町遺跡・高月遺跡・薬王寺台横穴群・高月館跡などの縄文時代から中世にかけての遺跡が重複している。

平城跡周辺の発掘調査歴は、平成12年(2000)に実施した福島県立磐城桜が丘高等学校運動場拡張にともなう試掘・確認調査(以下、「確認調査」という)を端緒とする。以後、令和2年度の発掘調査と確認調査など、規模の大小はあるが、計20回ほど実施している。本丸跡で4回、本丸跡外の台地上で14回、本丸南側の低地部の田町曲輪で3回である。このほか、平成23年(2011)3月に発生した東日本大震災により崩落した^{ぬしやぐら}塗師櫓石垣の記録調査が行われている。

調査の理由(調査原因)は様々で、学校の敷地拡張や校舎の建て替え、個人住宅建築や宅地造成、民間の集合住宅やホテルの建築、さらには、公共事業であるいわき駅前再開発事業および中心市街地活性化広場公園整備事業などがある。

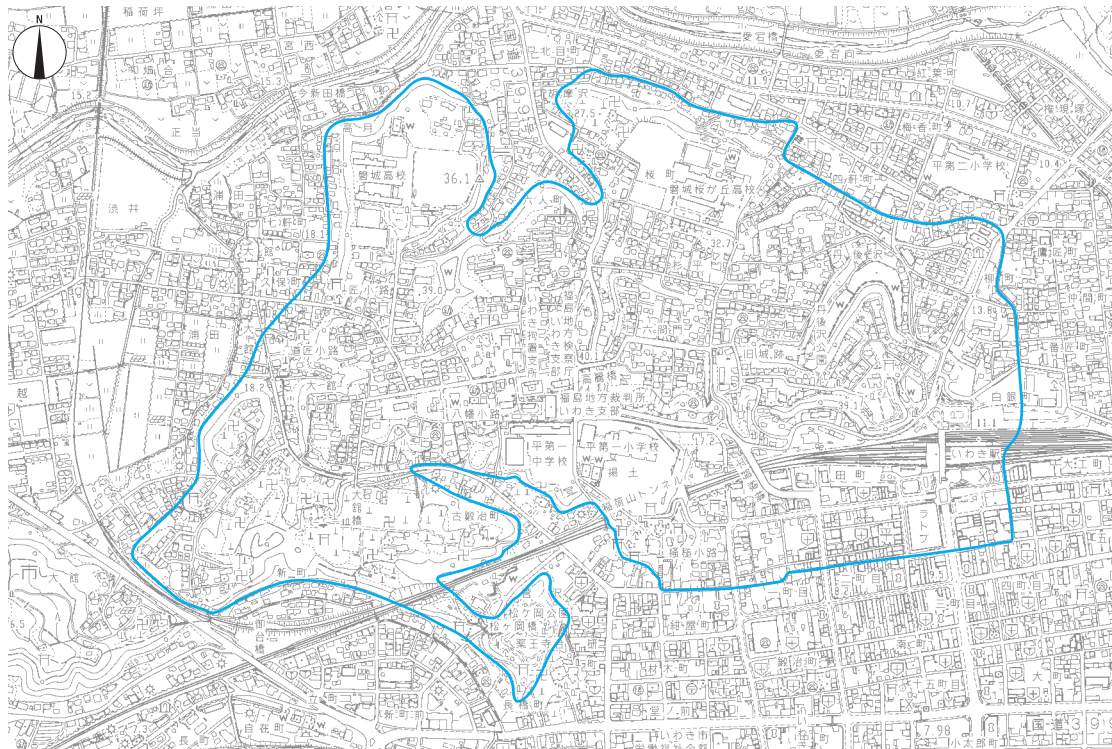


図66 埋蔵文化財包蔵地「平城跡」の範囲

(1:10,000)

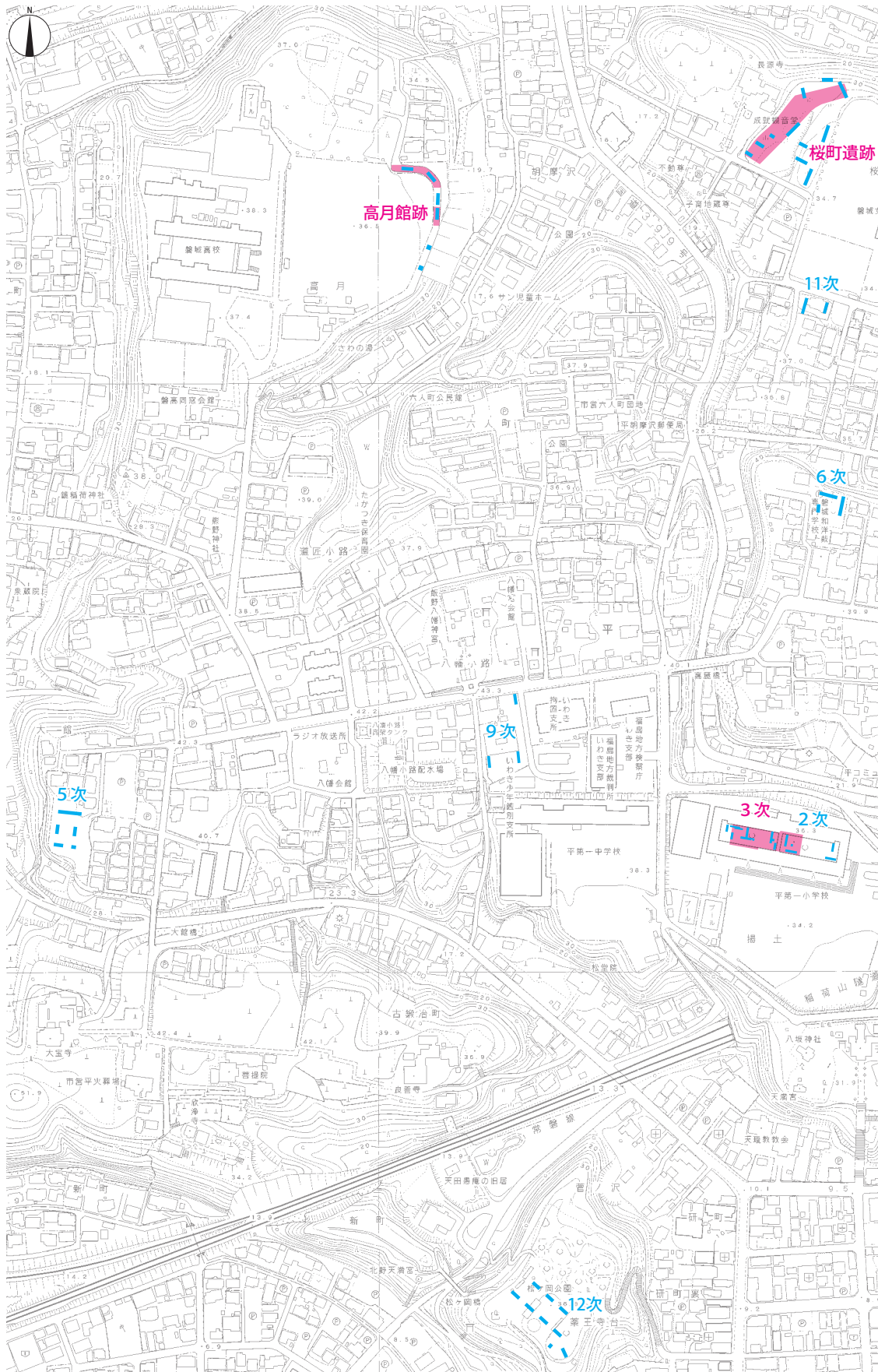


図67 平城跡関連調査位置図(1)

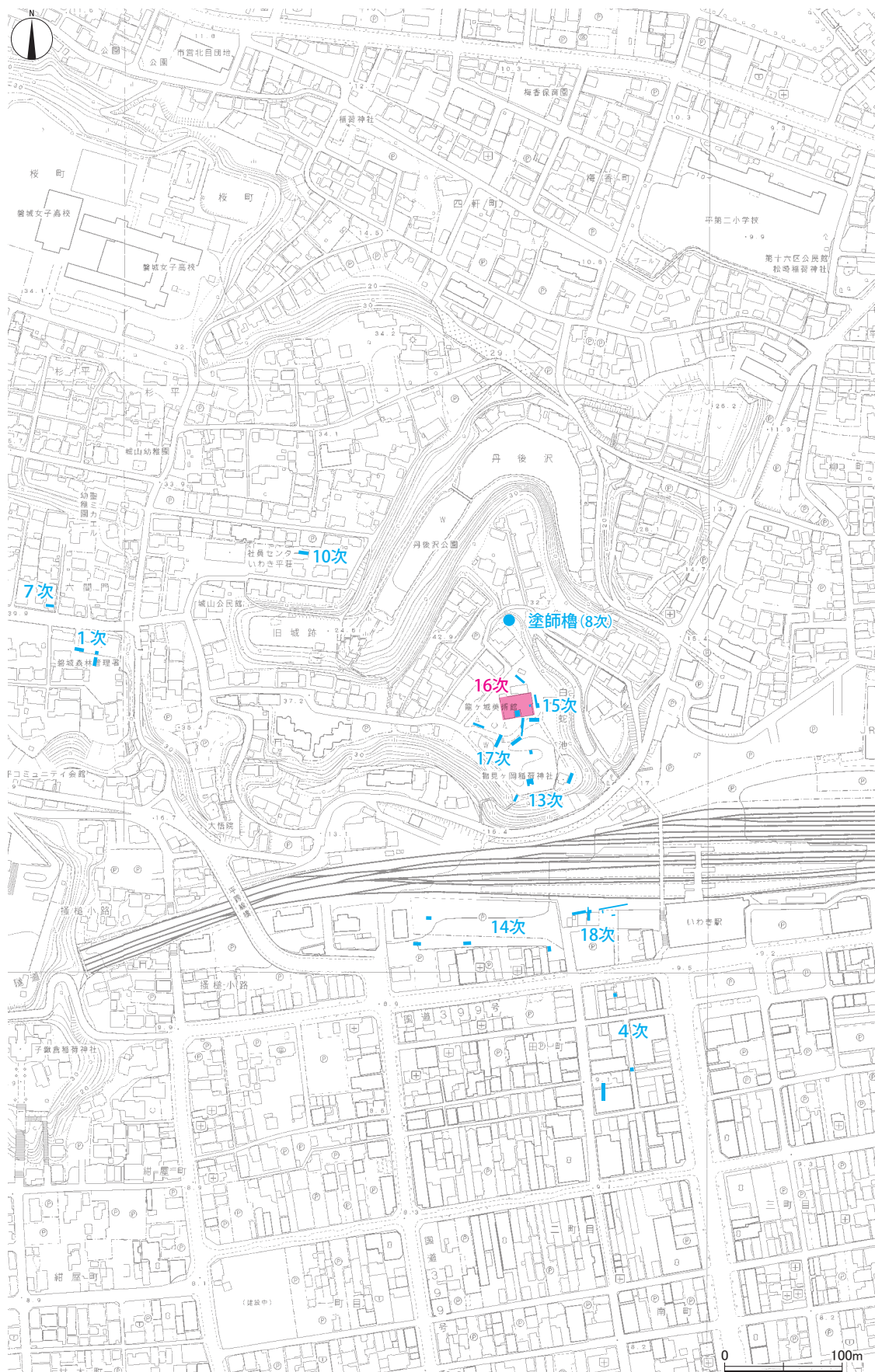


図68 平城跡関連調査位置図 (2)

青：試掘・確認調査、赤：発掘調査 (1/5,000)

表10 平城跡関連発掘調査実施状況

調査 回数	調査 年月	調査 年度	調査内容	調査事由	現 況	面 積 (㎡)	
						対 象	調 査
高月館跡 1次	1993/7	平成 5年度	発掘調査(高月館跡)	市道改良工事	磐城高校校庭	－	281.3
桜町遺跡 1次	2000/12	平成 12年度	確認調査(桜町遺跡)	磐城桜が丘高校運動場拡張	山林	4,995	12 本
桜町遺跡 2次	2001/4	平成 13年度	発掘調査(桜町遺跡)	磐城桜が丘高校運動場造成	山林・宅地	－	1,535
平城跡 1次	2005/6	平成 17年度	確認調査(六間門)	民間開発	宅地(旧平営林署跡)	－	72
平城跡 2次	2005/8	平成 17年度	確認調査(揚土)	平第一小学校校舎改築	小学校校舎	－	256
平城跡 3次	2006/1	平成 17年度	発掘調査(揚土)	平第一小学校校舎改築	小学校校舎	－	971
平城跡 4次	2006/2	平成 17年度	立会調査(田町)	駅前再開発ビル(ラトブ)建築	商業地	約 5,000	－
平城跡 5次	2009/7	平成 21年度	確認調査(平字大館)	集合住宅	雑地	2,089	180
平城跡 6次	2010/7	平成 22年度	確認調査(六間門)	個人住宅	宅地	837	31
平城跡 7次	2011/9	平成 23年度	確認調査(六間門)	個人住宅	宅地	113	14
平城跡 8次	2011/-	平成 23年度	石垣調査(旧城跡)	記録調査	磐城平城跡塗師槽	－	－
平城跡 9次	2014/9	平成 26年度	確認調査(八幡小路)	復興公営住宅	宅地(旧少年鑑別所跡)	2,184	42
平城跡 10次	2014/9	平成 26年度	確認調査(旧城跡)	個人住宅	宅地・畑地	266	20
大館城跡 1次	2014/11	平成 26年度	確認調査(好間町下好間字大館)	公園整備	公園・雑地	90	88
平城跡 11次	2014/12	平成 26年度	確認調査(桜堀)	個人住宅	宅地	481	48
平城跡 12次	2015/1	平成 26年度	確認調査(薬王寺台)	公園整備	公園	1,500	179
平城跡 13次	2017/2	平成 29年度	確認調査(本丸)	中心市街地活性化広場公園整備	旧宅地	200	38
平城跡 14次	2019/1	平成 31年度	確認調査(田町)	並木通り第一種市街地再開発	駐車場・駐輪場・緑地帯	1,280	50
平城跡 15次	2019/8	令和 元年度	確認調査(本丸)	中心市街地活性化広場公園整備	宅地	300	30
平城跡 16次	2020/6	令和 2年度	発掘調査(本丸)	中心市街地活性化広場公園整備	宅地	－	462
平城跡 17次	2020/9	令和 2年度	確認調査(本丸)	中心市街地活性化広場公園整備	宅地	－	310
平城跡 18次	2021/3	令和 3年度	確認調査(田町)	J Rいわき駅南口ホテル建設	商業地	680	127

遺 構	遺 物	成 果
竪穴状遺構・土坑・柱穴・溝跡・井戸跡	陶磁器・かわらけ・金属製品	縄文中期のフラスコ状土坑3基のほかは近世遺構が主体
江戸時代の整地下の遺物包含層直下に遺構	弥生土器・土師器・陶磁器	西方下に隣接する長源寺側は崩落などの危険があるため、調査対象から除外
竪穴住居・古墳跡・土坑・溝跡・柱穴・井戸跡・墓坑	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・石器・石製品・土製遺品・金属製品・銭貨・人骨	12・13世紀の中国磁器、中～近世の墓域から15世紀末～19世紀の肥前・瀬戸・大堀相馬産の陶磁器、かわらけが出土
土坑・溝跡・ピット	陶磁器・瓦	礎石建物跡の基礎、御用屋敷期または御蔵期の遺構
整地層・土坑・池跡・溝跡・包含層	弥生土器・かわらけ・陶磁器・瓦・鉄製刀子	城郭期～近代の遺物廃棄跡
堀跡・土坑・溝跡・整地層	縄文土器・弥生土器・土師器・陶磁器・かわらけ・石器・石製品・土製品・金属製品・銭貨・自然遺体・動物遺体	中世：整地層・整地後の堀跡、近世：厠、17世紀前半の景德鎮染付皿・かわらけ、19世紀までの陶磁器・瓦が出土
外堀・土坑	陶磁器・木簡等木製品・石製品・金属製品・ガラス製品	幕末～明治期前半の豊富な資料が外堀跡から出土
柱穴・溝跡・墓跡・土坑・包含層	銭貨・歯・骨片・木片（木棺）	近世墓11基検出
土坑・溝	土師器・かわらけ・陶磁器	江戸時代の整地層を確認
なし	陶磁器・かわらけ・瓦	江戸時代の整地層を確認
石垣	なし	北面が崩落した市指定塗師櫓石垣の記録調査
土坑・溝跡・柱穴	土師器・須恵器・かわらけ・瓦質土器	江戸時代の整地層を確認
堀跡・溝跡・柱穴	弥生土器・土師器・須恵器・かわらけ・陶磁器・瓦・石器・漆器・角角製品	中～近世の堀跡、江戸時代の柱穴・整地層を確認
竪穴建物跡・土坑・柱穴群・掘立柱建物跡	土師器・かわらけ・常滑系陶器・白磁・青磁・石製品	大館城跡主郭、15～16世紀の掘立柱建物跡・柵列を検出
なし	なし	桜堀の埋土
なし	なし	攪乱顕著
ピット	弥生土器・土師器・須恵器・かわらけ・陶磁器・瓦・土製品・鉄製品	18世紀中頃のかわらけと中～近世陶磁器・瓦が出土
なし	かわらけ	江戸時代の整地層を確認
土坑・溝跡・柱穴	陶磁器・瓦	硬化した平坦な焼成面を確認
礎石建物跡・掘立柱建物跡・井戸跡・石組遺構・土坑・厠・祭祀遺構・溝跡・柱穴群・堀跡・庭園跡	縄文土器・土師器・須恵器・かわらけ・陶磁器・瓦・埴輪・石器・石製品・金属製品・銭貨・漆器・木製品・ガラス製品・炭化材・鉄滓・獣骨	本丸跡の遺構が良好に残る。江戸時代の整地層や落城後の後片付けの痕跡を確認。本丸御殿に庭園遺構が隣接。中世の堀跡を検出
石組遺構・内堀・柱穴	かわらけ・陶磁器・瓦・瓦質土器・木製品・金属製品・ガラス製品・皮革製品・獣骨・植物遺体	明治時代の石組遺構下に、磐城平城の内堀跡を検出

調査は、いわき市教育委員会が主体となり、いわき市教育委員会から業務委託を受けた公益財団法人いわき市教育文化事業団が実施している。

以下、調査地点を地点ごとに記述する。

2 調査の成果

(1) 本丸跡

① 公園整備事業の発掘調査

本丸跡の発掘調査（以下、「本調査」という。）は、いわき市が計画した「中心市街地活性化広場公園整備事業（仮称）磐城平城・城跡公園」に関連した体験学習施設建設にともない、令和2年（2020）度を実施された。調査面積は462㎡である。

近現代の盛土を除去すると、磐城平城の本丸御殿跡を構成する礎石や柱穴などが面的に検出され、さらに下層からは中世から近世の遺構が2・3面確認された。

江戸時代末の遺構群は、現地表面から約50cm下方から検出された。礎石建物跡・石組遺構・石組列・溝跡・厠跡・柱穴などが検出された。これら建物跡等の軸線はN50°Wを示している。また、戊辰戦争の際に新政府軍によって撃ち込まれたと推定される砲弾が地面に突き刺さった状態で検出された。これらの遺構は、戊辰戦争後の片付けと考えられる厚さ10cmほどの焼土混じりの炭化物層（以下、「炭化物層」という。）に覆われていた。この炭化物層からは18～19世紀前半の陶磁器の破片が多量に出土し、とくに肥前産の染付磁器を主体とし、瀬戸美濃や大堀相馬に混じって、まれに中国産も認められる。染付磁器には組物や大型の製品が揃い、本丸御殿に相応しい内容と言える。このような状況から、本遺構群は幕末まで使用されていた磐城平城の本丸御殿跡と推測された。

江戸時代末の遺構面の下層は、厚さ約50cmの盛土（以下、「整地層」という。）が施されている。整地層は、数cm単位の厚さで細かく分層される土層や、十数cmの厚さで調査区全体を覆う大規模な土層まで認められた。これらの整地層は、近世の瓦や陶磁器が多量に含まれることから、磐城平城築城時およびそれ以後の行われた造成（普請）の結果であり、建物等の改築にあわせて行われた結果と想定される。詳細な時期については今後の検討を必要とするが、整地層中段から掘り込まれている遺構は明らかに江戸時代に位置づけられ、石組遺構（側溝）、柱穴、井戸跡、厠跡などが検出された。絵図によると、磐城平城の本丸は築城当初から移動していないことから、検出された遺構群についても、17世紀以降の磐城平城の本丸御殿跡とみて間違いないものと推測される。

整地層直下の現地表面から約1mの深さからは、強い熱を受けて赤褐色に硬化した面（以下、「焼成面」という。）が確認された。焼成面は、調査区内のトレンチすべてにおいて検出され平坦を意識して形成されていることも想定された。この焼成面の時期は、出土遺物の検討から中世後半から近世初頭と推測される。磐城平城築城時の造成に関わる人為的な行為と推察されるが、現在のところ類例がなく不明と言わざるを得ない。また、調査区北東



図 69 南上空から見た磐城平城本丸跡



図 70 真上から見た磐城平城本丸跡発掘調査区全景

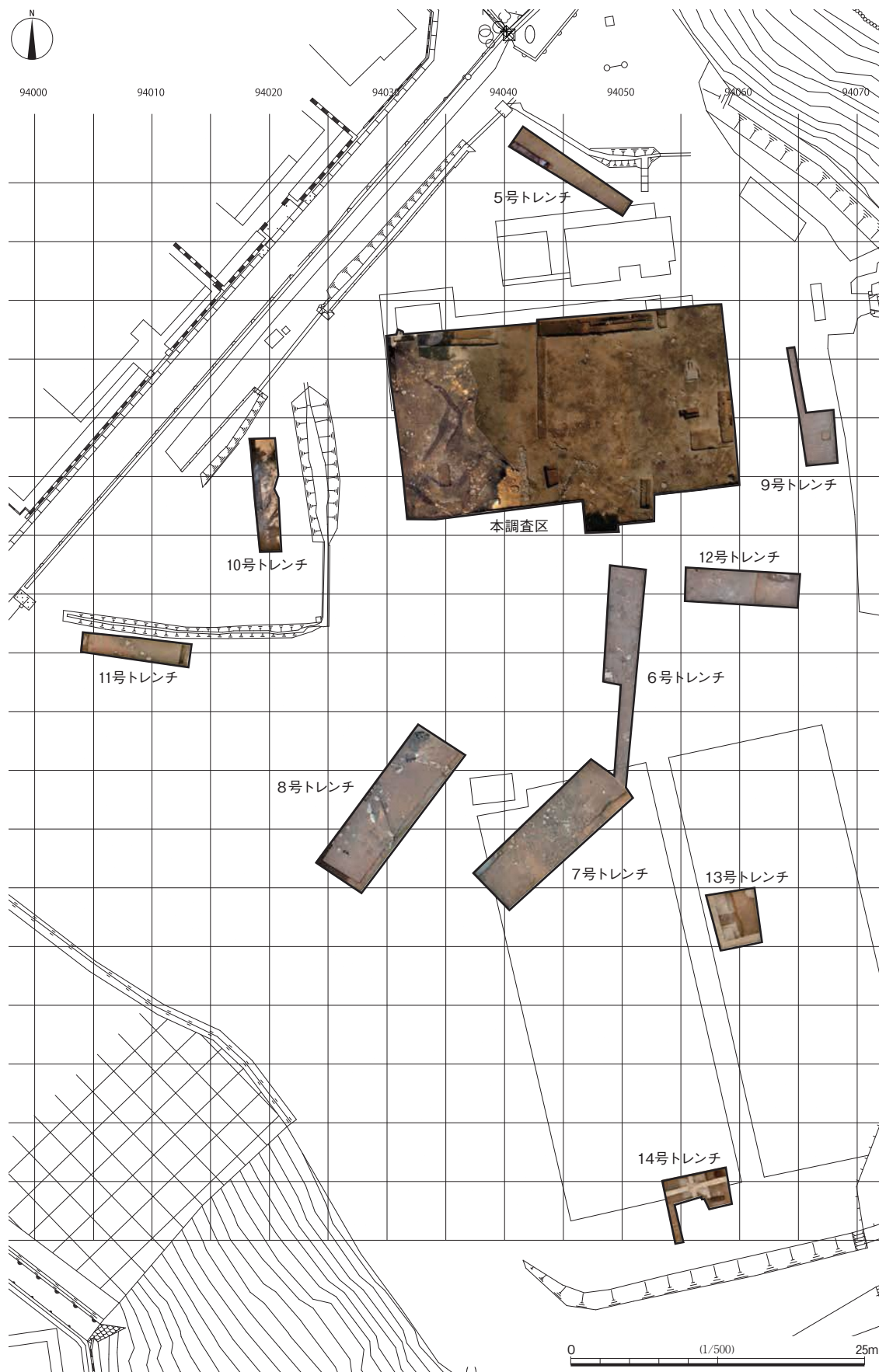


図 71 本丸跡調査位置図

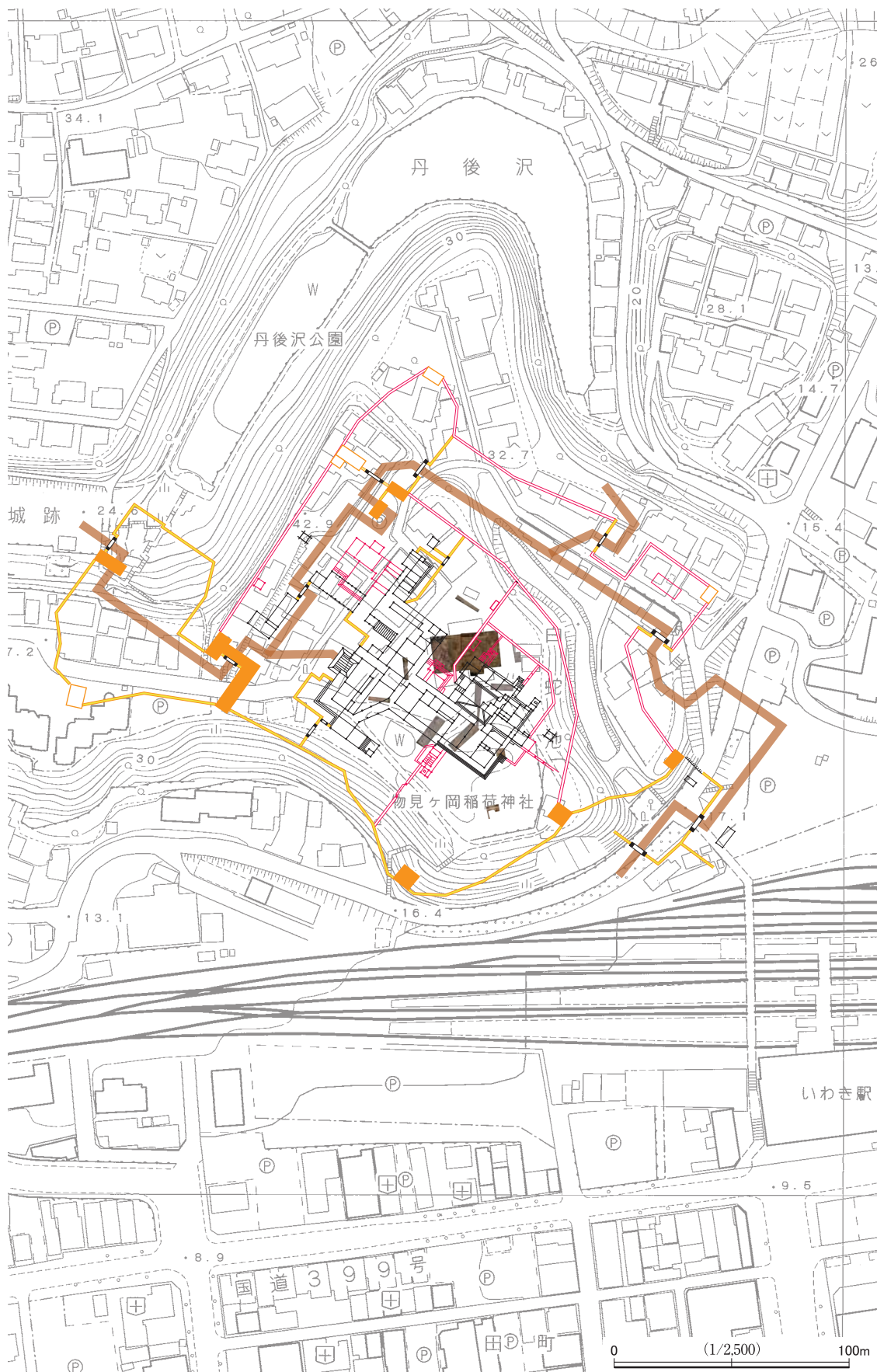


図72 本丸跡の調査位置と本丸御殿の復元案

(教育文化事業団作図)



図73 本丸跡発掘調査遺構検出状況

隅からは、かわらけが数十点重なり合って出土し、磐城平城築城にともなう祭祀跡^{さいしあと}と考えられる。

焼成面下は、段丘基盤となる褐色ローム層となる。下層のトレンチ調査における土層観察では、南北方向を軸とする上幅約2.8m、深さ約1.2mの堀跡が検出された。堀跡から出土した木製品について放射性炭素年代測定を実施したところ、15世紀中葉頃の測定値が示され、磐城平城築城以前に埋没したことが想定される。(木次谷裕子)

② 公園整備事業の確認調査

中心市街地活性化広場公園整備事業にともない、整備予定範囲内に平成29年(2017)度に2箇所と令和元年(2019)度に2箇所(1～4号トレンチ)を設定して実施した。

1号トレンチ 対象地区の西側に4.5m×3mの規模で南北方向に設定した。現地表面から地山(段丘基盤層)までの深さは、南側で30cm、北側で1.5mで、地山面が本丸の外側から内側に向かい緩やかに傾斜していることが確認された。堆積層は5層に分けられ、いずれの層にも瓦片が含まれる。第4層からは18世紀中葉のかわらけ皿が出土している。その他の出土遺物には、弥生土器、土師器^{はじき}、須恵器^{すえき}、鉄製品などがある。遺構は検出されなかった。

2号トレンチ 対象地区の東側に8m×3mの規模で南北方向に設定した。南壁面の観察で、第3層を掘り込むピットが1個(径43cm、深さ36cm)検出された。堆積土中には瓦片が含まれる。江戸時代末の遺構と推察される。第1・2層の北側では2m程度の範囲で焼土層が検出されている。出土遺物には陶磁器(中・近世)、瓦、刻字のある瓦質土製品、レンガ、ガラスなどがある。瓦を主体とした遺物は、第4層まで出土する。トレンチ北端部では現地表面から2.3mで地山を確認したが、南端ではさらに深くなり確認できなかった。

3号トレンチ 体験学習施設予定地内となる個人住宅の玄関先に6m×4mの規模で設定した。現表土層である厚さ約50cmの盛土を除去すると、溝跡1条、土坑1基、ピット1個が検出された。下層では2層に分層される整地層が確認されたほか、現地表面下約1mの深さからは硬化した焼成面が確認された。

4号トレンチ 体験学習施設予定地内となる個人住宅東側軒先に3m×2mの規模で設定した。現地表面下約50cmで遺構検出面が確認された。遺構は、整地層中から掘り込まれた土坑1基が検出され、さらに下層には3号トレンチで検出されたような焼成面も確認された。

(木次谷裕子)

③ 本丸御殿の確認調査

本調査において遺存状態が良好な本丸御殿が検出されたことを受け、本丸御殿跡の範囲をはじめ、本丸跡における遺構の遺存状況の確認を目的として、確認調査が実施された。

確認調査は、公園整備予定地内に10箇所のトレンチを設定して実施した。トレンチ番号は、本丸跡内における従前の確認調査のトレンチ番号を踏襲し、5～14号とした。

5号トレンチ 本調査北側の稲荷神社西側に10m×2mの規模で設定した。炭化物層

は明瞭ではなかったが、現地表面下約50～70cmにおいて江戸時代末と想定される遺構面が確認され、溝跡が検出された。下層からは本調査区同様の整地層が確認され、現地表面下約1.0mから礎石と柱穴が検出された。

6号トレンチ 本調査区の南側3mに10m×3mの規模で設定した。さらに、南端を8m×0.5mの規模で拡張(6号トレンチ拡張部)し、7号トレンチまでの連続する土層堆積状況を検証した。

本調査区と同様に炭化物層に覆われた江戸時代末の遺構面は、現地表面下約60～70cmで確認され、礎石、石組遺構、溝跡、ピットが検出された。また、拡張部では現地表面下約80cmから礎石が検出された。整地層上面は、南側に向かって緩やかに傾斜することも確認された。炭化物層の確認は、拡張部での北端までにとどまり、南側まで広がらない。

7号トレンチ 6号トレンチの南に15m×5mの規模で設定した。炭化物層は認められなかったが、現地表面下約1mから礎石、ピット、根石状遺構^{ねいしじょういこう}、池跡などが重複して検出された。各遺構の検出状況や出土遺物から、池跡などが江戸時代末、根石状遺構などがそれ以前と時期差が想定される。

池跡については、堆積土中に敷き詰められた瓦の状態や護岸に使用された石材の違いにより、複数回の造り替えが想定される。よって、早い段階に構築されていたことが推察される。

8号トレンチ 本調査の南側、7号トレンチの西側6mに15m×5mの規模で設定した。炭化物層は認められなかったが、現地表面下約1.1mから池跡、ピット、竪穴状遺構が重複して検出された。検出状況や土層観察、出土遺物から、江戸時代末まで使われた遺構は池跡のみで、ピットや竪穴状遺構はそれ以前の遺構と想定される。

池跡の南北幅は約9mを測る。護岸には径30～90cmの緑色片岩と花崗岩の自然石が利用され、3段に積み上げられている。堆積土の上層からは19世紀代後半の染付磁器が出土していることから、明治時代以降まで露出していたことが推測される。

9号トレンチ 本調査区の東側に5m×3m規模で設定した。さらに、北側に5m×0.7mの規模で拡張した。炭化物層は認められなかったが、現地表面下約70～80cmから石組遺構が検出された。下層には本調査区同様の整地層も確認されている。石組遺構は軸線の異なる3基が重複している。検出状況と土層観察から、1基は江戸時代末、他の2基はそれ以前と想定される。整地層直下の焼成面は、トレンチ拡張部北端部から現地表面下約1mにおいて確認されている。

10号トレンチ 本調査区の西側に10m×2mの規模で設定した。炭化物層は認められなかったが、現地表面下約70～80cmから竪穴状遺構、ピットが検出された。下層には本調査区同様の整地層が確認されている。

竪穴状遺構^{たてあなじょういこう}の幅は約6.3mを測るが、本来の形状は不明である。瓦を密に含む堆積土からは陶磁器、金属製品、石製品、木片、礫^{れき}等が混在した状態であった。陶磁器は18～19世紀代に比定されることから、江戸時代以降明治時代まで機能していた可能性が考えられる。整地層直下の焼成面は、トレンチ南端の深掘りにより、現地表面下約1mから確認されている。

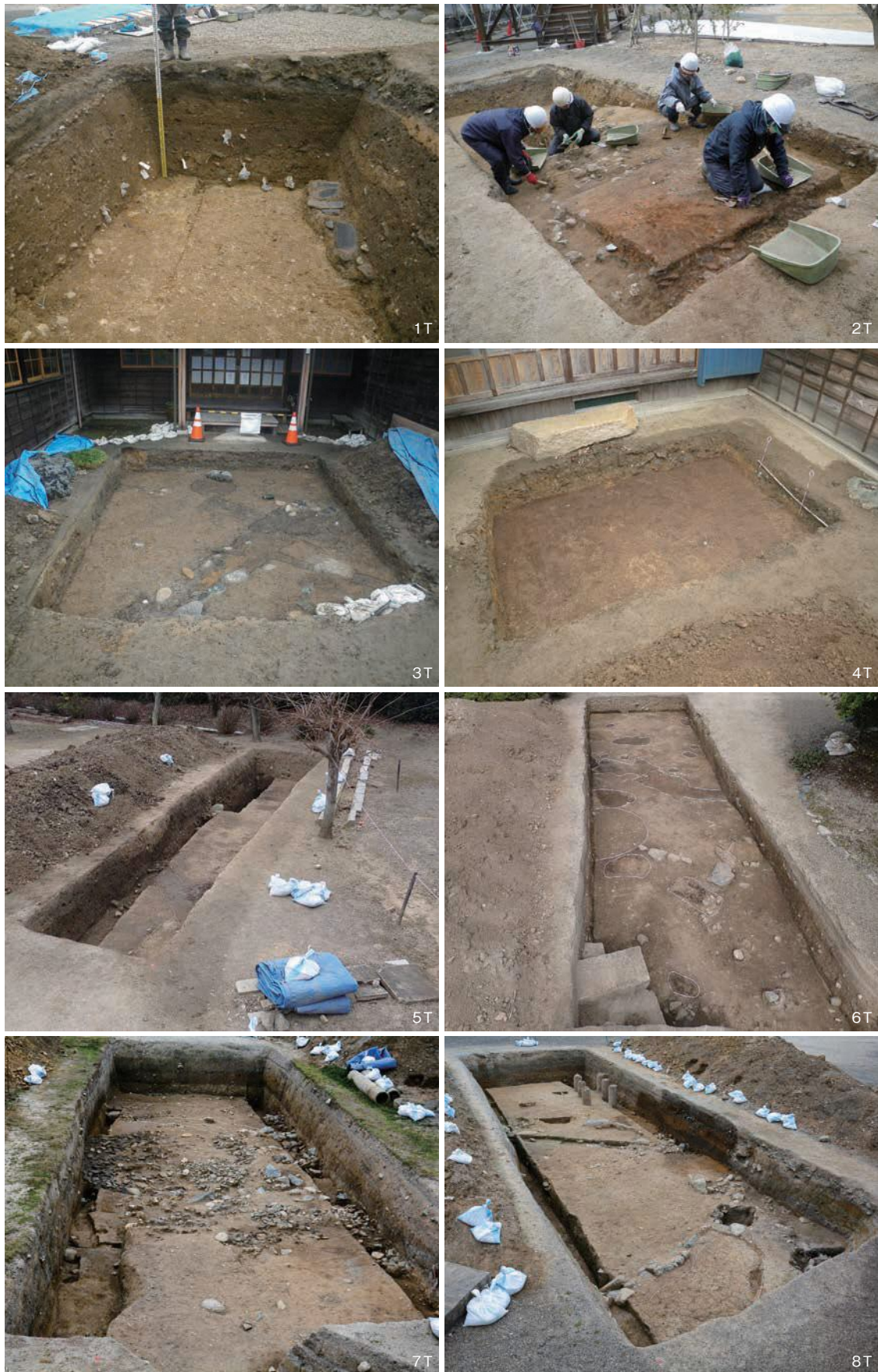


図74 本丸跡確認調査遺構検出状況 (1)



図75 本丸跡確認調査遺構検出状況（2）



図76 本丸跡確認調査遺構検出状況(3)

11号トレンチ 本調査区の南西側に10m×2mの規模で設定した。現地表面下約90cmから石列、ピットが重複して検出された。石列は40～50m大の礫を使用し、軸方向はN50°Wで、本丸御殿の軸線にはほぼ近い。整地層直下の焼成面は、本調査区や他のトレンチに比べ硬化が弱く、散発的な状況で確認されている。

12号トレンチ 本調査区の南東、9号トレンチの南側6mの位置に10m×3mの規模で設定した。トレンチ東半部分には明治時代以降の大規模な掘削が存在していた。西半部では、現地表面下約50～60cmから炭化物層が確認され、柱穴、ピットが検出された。本調査区同様の整地層も確認され、現地表面下約1mの整地層中からも柱穴が検出された。

13号トレンチ 本調査区中央から南寄側、7号トレンチの東側の位置に5m×4mの規模で設定した。本トレンチは昭和30年代のコンクリート基礎工事による攪乱が及んでいたが、その基礎工事範囲以外では遺構が良好に遺存していることが確認された。遺構は現地表面下約90cmから、竪穴状遺構、ピットが検出された。炭化物層・焼成面は検出されず、整地層も明瞭には確認できなかった。

14号トレンチ 13号トレンチの南側に5.7m×3.7mの規模で設定した。さらに、7m×0.5mの規模で拡張した。13号トレンチと同様、コンクリート基礎工事による攪乱が及んでいたが、それ以外の部分には遺構が良好に遺存していた。

現地表面下約60cmから石列が検出された。炭化物層は明瞭ではないが、石列はトレンチ西端の整地層上面に構築され、江戸時代末と想定される。軸方向はN60°Eを示す。

攪乱を除去すると、現地表面下約1.3～2mから多量の瓦が出土した。瓦は厚く層状をなし、南から北に緩やかに傾斜して堆積している。北側では厚さ約50cm以上になる。

また、トレンチの最下層では拳大の礫が層状に検出された。これらは、土層観察と出土遺物から江戸時代のものと推察される。

小 結 調査の結果、江戸時代当初の磐城平城築城時から幕末までの遺構・遺物が、本調査区を含む広範囲の整備事業区域内から重層的に検出された意義はきわめて大きい。これらの遺構および各種の遺物などを踏まえれば、磐城平城の絵図に描かれた本丸御殿跡に比定することができる。また、7・8号トレンチから検出された池跡からは、御殿前面(南側)には庭園が広がっていたことが想定される。さらに、南端の14号トレンチに

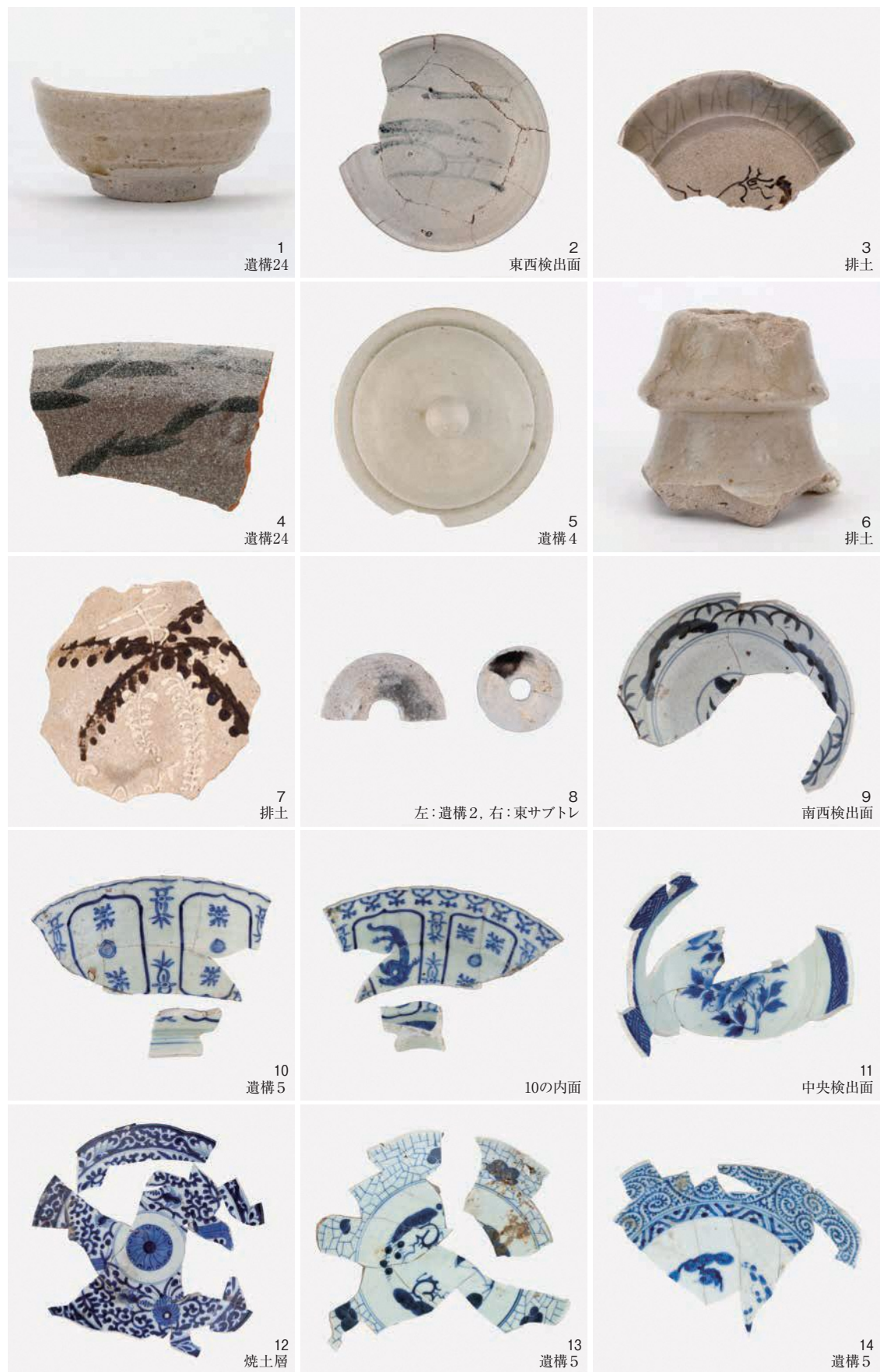


図77 本丸跡発掘調査出土遺物(1)



図78 本丸跡発掘調査出土遺物(2)



図79 本丸跡確認調査出土遺物 (1)

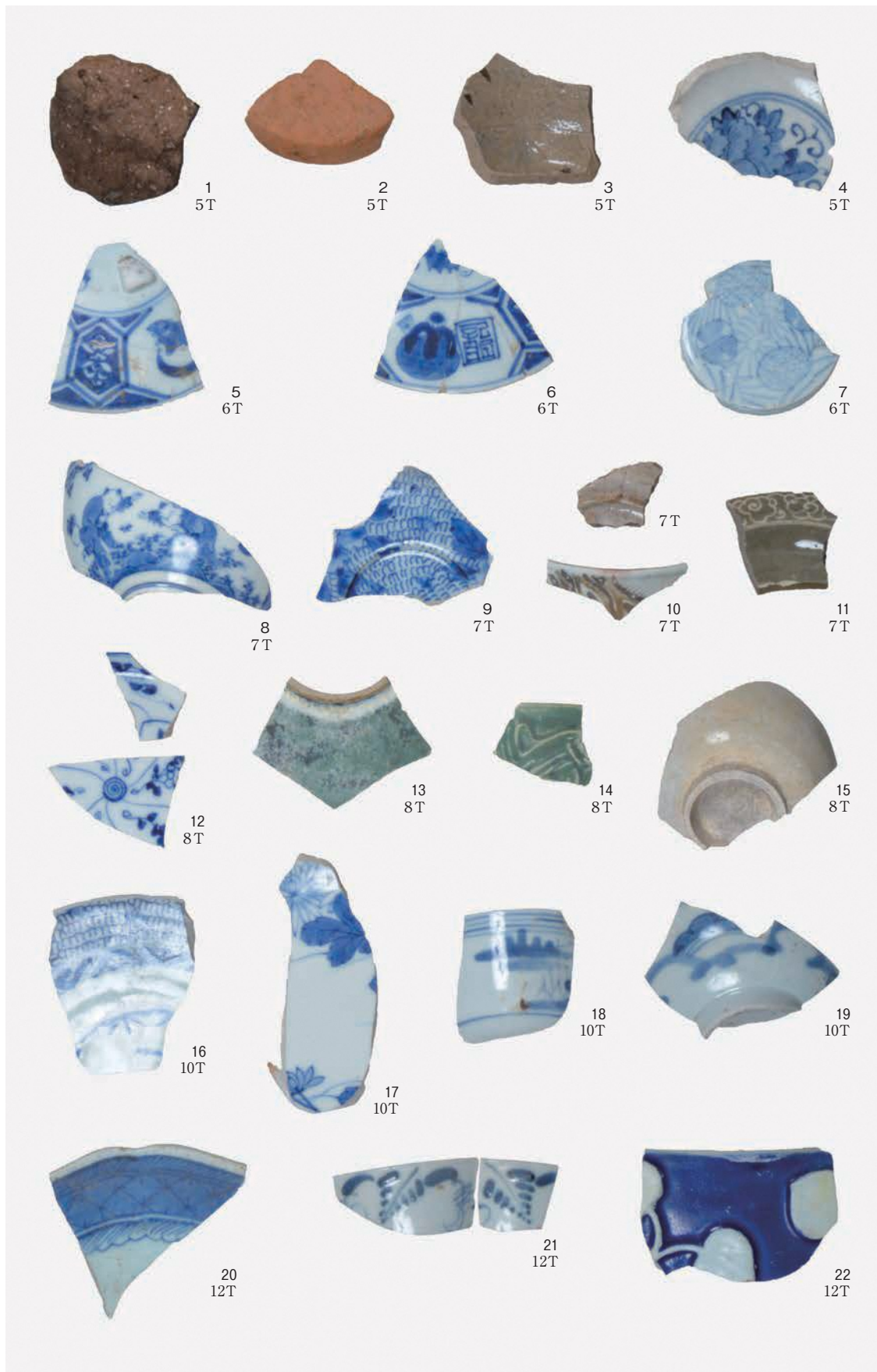


図80 本丸跡確認調査出土遺物(2)



図81 本丸跡確認調査出土遺物(3)

おける遺構の検出も、本丸跡縁辺部の土地利用を検証する上で重要な発見と言える。

本調査区の成果では、12号トレンチなどで確認された近代以降の大規模な削平が及ぶ箇所はあるものの、全体的に遺構の遺存状態は予想以上に良好であることが想定される。さらに、築城以前の中世岩城氏段階とみられる遺構も確認できたことは大きな成果と言える。今後、考古学的調査成果に古文書等の文献を含めた幅の広い研究を進めることが求められる。

(木次谷裕子)

④ 市指定史跡「磐城平城跡塗師櫓石垣」の調査

塗師櫓は、本丸北端中央部に位置する北出入口に取り付く櫓である。残存するその石垣は、「磐城平城跡塗師櫓石垣」として平成13年(2001)4月に市史跡に指定されている。塗師櫓や櫓形櫓などの多くの建物は、廃藩置県後に民間に払い下げられており、塗師櫓石垣の一部は、後世の住宅建築などの削平により、かなり早い段階に破壊されていたものと推測される。また、平成14年(2002)度には、北西隅および北東隅において、復旧工事が行われ、新たに積み直された石垣も存在する。

平成23年(2011)3月に発生した東日本大震災の影響により、塗師櫓石垣および中門櫓石垣の一部が崩落した。塗師櫓石垣は市道を塞ぐ大規模な崩落となり、石材の撤去が必要となったことから、石垣の調査および記録作成が工事に先立って実施された。

撤去工事の際の調査

調査および撤去方法については、小野一雄氏(当時、市文化財保護審議会会長)と鈴木啓氏(当時、北日本近世城郭検討会会長)の指導を仰いだ。

落下状況の平面図を作製し、同時に石材の位置関係も把握に努めた。崩落した石材には油性塗料で番号を付け、石材の形状を計測し、写真撮影も行った。裏込めの栗石については、全量を回収することとし、大型土嚢袋に収納した。

これらの石材は、いわき市の埋蔵文化財収蔵施設敷地内に移動し、屋外で保管している。

この段階で、将来的な石垣復元を視野に入れ、石垣の範囲と形状を記録するため、3Dレーザースキャナーによる現況地形確認システムを利用した平面図・横断面図・立面図を作製した。石垣の東・北面については、平成14年度に株式会社オリスに委託して作製した側面図・横断面図を利用して追加補正を行った。

測量図作製後、余震が続く石垣が不安定な状態が続くことを懸念し、安定する高さまで石材を撤去することとした。その際、東面の中段に生える樹木による悪影響を考慮し、樹木の取り除ける位置を基準として、北・南面についても同じ高さまで撤去している。

石垣の現況調査

これまで、塗師櫓石垣の測量は行われておらず、平面図を作製できた意義は大きい。石垣の底辺は、後世の盛土や市道建設等で地下に埋没していることが想定されるが、指定に先立つ平成13年度の調査と今回の測量値を整理すると、表11のとおりである。崩落や削平部分はあくまで推定となるが、本来は東西にやや長い長方形の櫓台となる。

北東隅と南東隅は、平成14年度に復旧工事を実施し、南面の東側上方においては、石



図82 磐城平城跡塗師櫓石垣 東面

(平成14年撮影)



図83 磐城平城跡塗師櫓石垣 北面

(平成14年撮影)

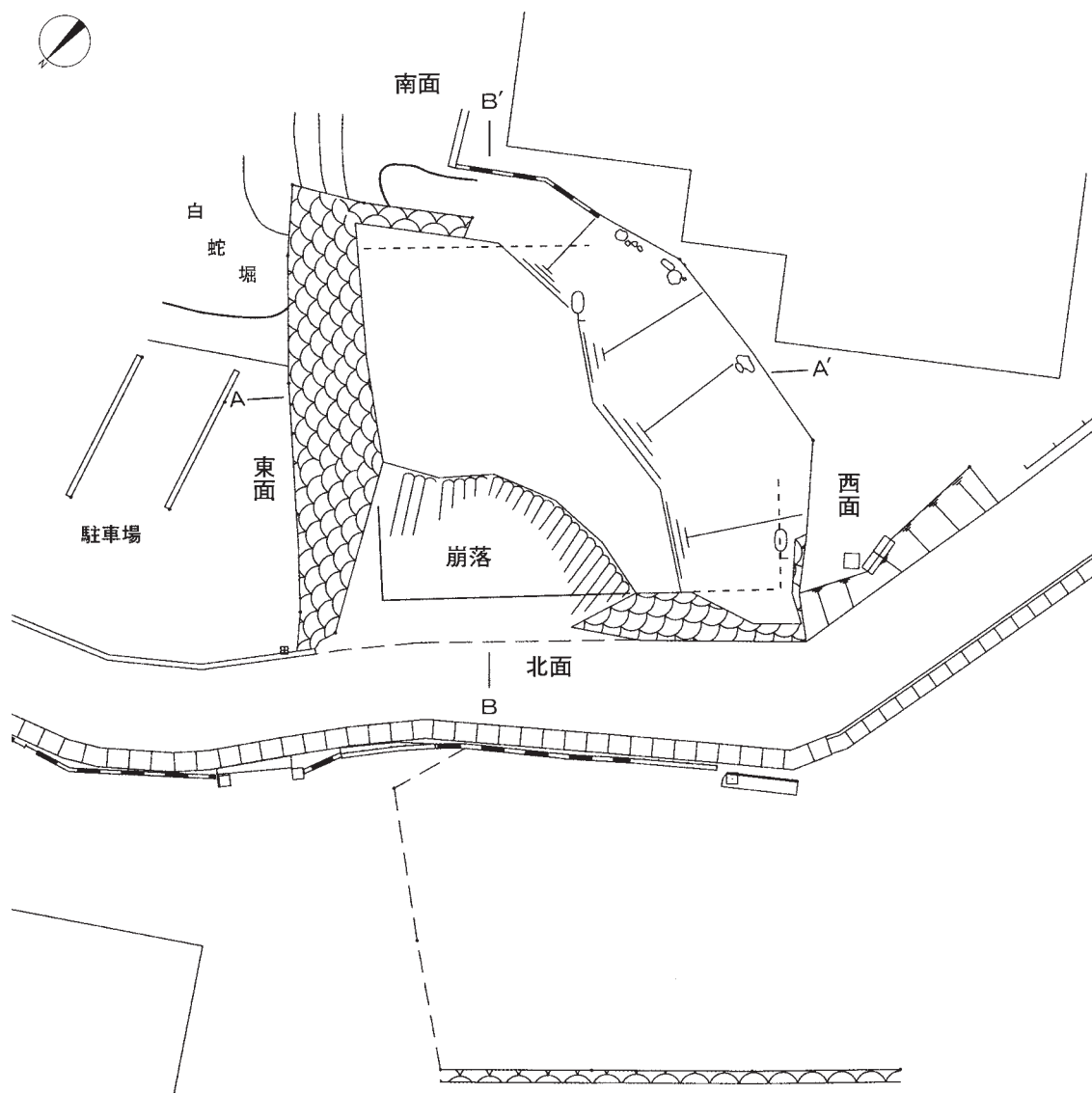


図84 磐城平城跡塗師櫓石垣 現況平面図

(平成23年作製)

表11 磐城平城跡塗師櫓石垣の計測値

	底 辺 (直線距離)	底 辺 (水平距離)	上 辺 (水平距離)	高 さ (斜距離)	高度差 (標高差)	備 考
東面	13.1	<12.8>	<9.7>	7.8	7.5	
北面	<13.6>	<13.4>	<7.9>	6.5	6.3	底辺の復元推定値は 14.0m
西面	<2.8>	<2.8>	不明	<1.8>	<1.9>	

単位：m, < > 残存長

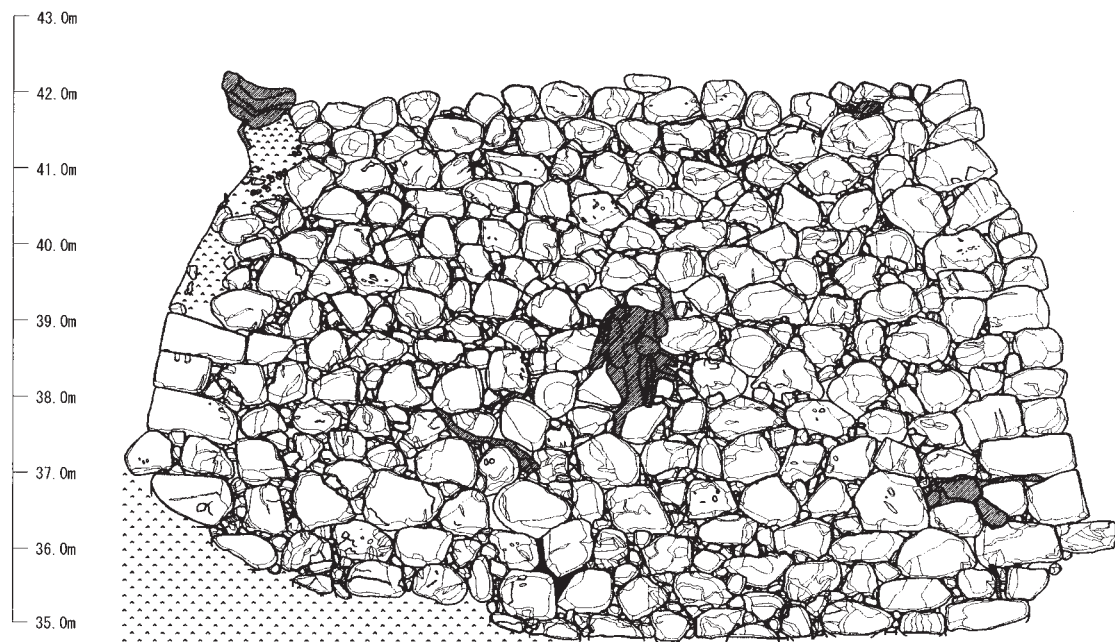


図85 磐城平城跡塗師櫓石垣 東面

(平成14年作製)

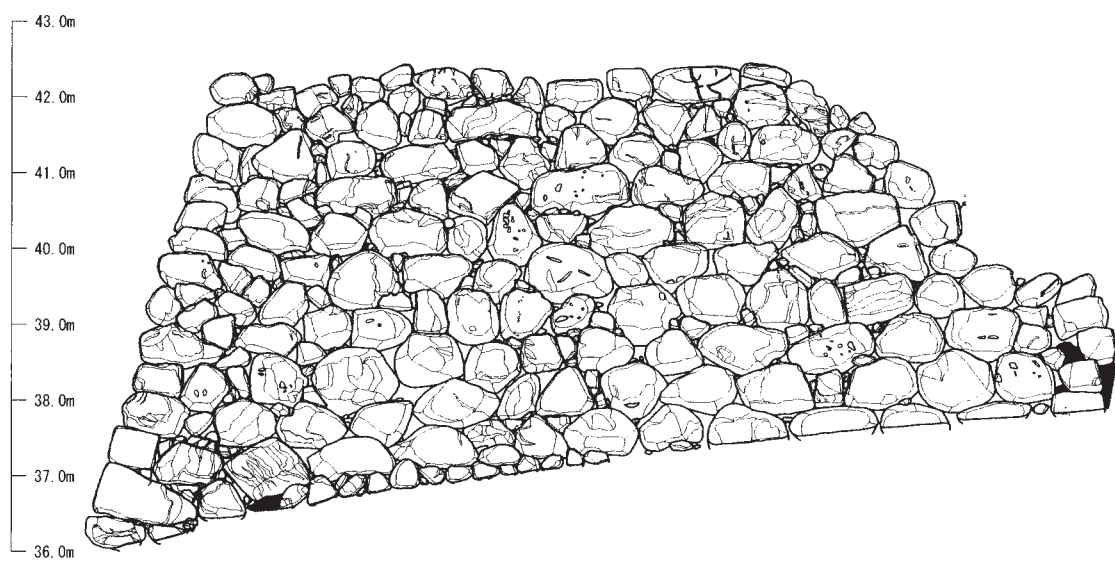


図86 磐城平城跡塗師櫓石垣 北面

(平成14年作製)

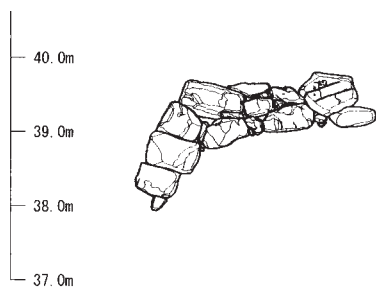


図87 磐城平城跡塗師櫓石垣 西面

(平成14年作製)

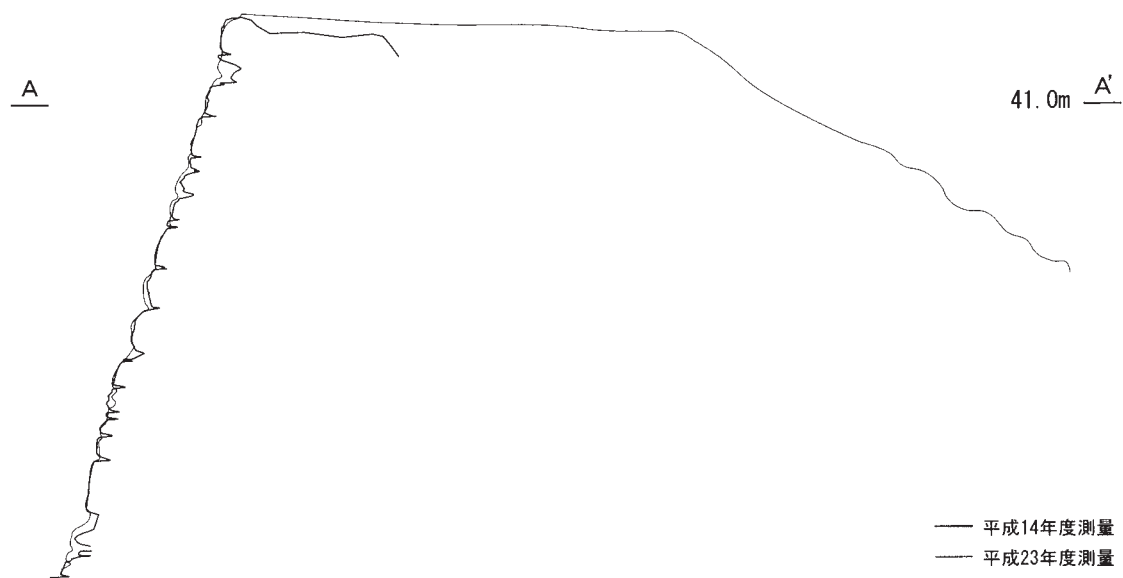


図88 磐城平城跡塗師櫓石垣 東面横断面図



図 89 磐城平城跡塗師櫓石垣 北面断面図

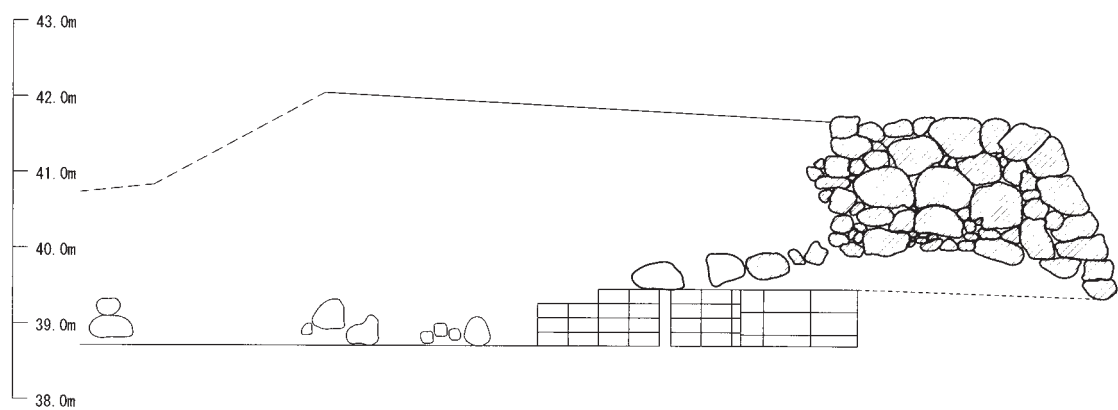


図90 磐城平城跡塗師櫓石垣 南面石材撤去範囲および横断面

垣を復元して積まれている。

北面については、石材のあり方や北面の底辺との高低差を考慮すれば、底辺部は市道の下に埋もれていることが想定される。

北東隅の底辺には石材が認められず、隣接する市道工事の際に抜き取られた可能性が考えられる。抜き取りの影響で一部の石材は、市道側に突出している。

東面は、中央部に木の根が入り込み、不安定な状態である。また、北側底辺部分については、東上方からの崩落土によって覆われている。

南面の西側は大きく削平され、地表面に巨石が数個露出しているが、原位置からは動いているとみられる。さらに、平成14年度に復元した石材を撤去したところ、内側から本来の石垣と推定される石材が整然と並んだ状態で検出された。

西面は、これまで堆積土に埋もれて確認できなかったが、底辺の一部が残存していることが確認された。

石垣の積み方と石材

石垣の積み方は、自然石を用いた野面積みによる布積み崩しである。北東の出角下方は布石を用いて算木積みを行っているが、中段から上方は野面積みのため、出角の稜線が整っていない。北西および南東の出角については、遺存する下方をみれば、布石による算木積みを確認できる。

東面は、北側底辺付近は北側の土手から流れ込んだ堆積土に覆われ、確認が不可能である。また、南東出角は、北東出角より算木積みの位置が高い位置まで配置されている。

南面は、江戸時代の絵図によれば本丸北側の塀が取り付けられ、塀の下方は急傾斜の土手となっている。本来の石垣は、土手状盛土に被覆されていたと考えられる。

石材は、泥岩系の岩石と花崗岩からなり、とくに花崗岩が多い。泥岩系の岩石は好間川上流域から、花崗岩は夏井川中流域の小川町西小川周辺から運ばれたことが推定される。また、栗石は花崗岩安山岩・砂岩・緑泥片岩の円礫が多く、好間川流域の自然石を採集したものと推測される。

(木幡成雄)

(2) 大手外曲輪

① 旧城跡地区の確認調査

平成26年(2014)に個人住宅建築にともない、建屋の基礎工事予定範囲内に10m×2mのトレンチを設定して実施した。現地表面から約1.2mの深さで地山の砂礫層となる。

堆 積 土 第1層が明治時代以降の盛土層である。第2層は厚さ20～40cmで、瓦を主体に、陶磁器、瓦質土器などが出土している。上面は建物解体等の影響を受けているため、凸凹が顕著である。第3層は柱穴の堆積土である。第4層はシルト礫が密に混入し、第5～7層には礫のほかに炭化物などが含まれる。層上面は熱を受け赤褐色に変色した土壌が散在する。本丸跡で検出された炭化物層に対応する土層である。また、第4～7層までの厚さは50～80cmで人為的な盛土と考えられ、本丸跡の整地層に対比される。第7層

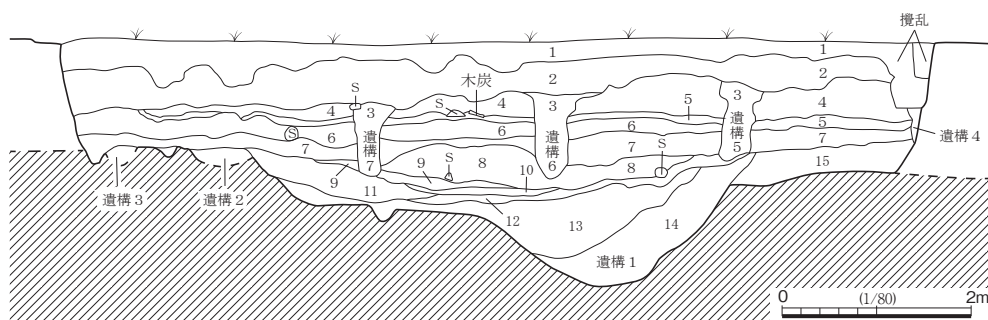


図91 旧城跡地区確認調査土層堆積図

直下は、トレンチ東側では黒褐色土の第15層が堆積しているが、西側では地山となる。

堀 跡 南北方向に延びる堀跡と想定される。壁面の土層観察では第15層上面から掘り込まれており、幅は5.4m、深さは1.45mである。西側壁面の中段には幅約2mのテラスが造り出され、検出面からテラスまでの深さは60cmである。堆積土は7層に分層される。土層観察では、当初東側から西側に第14層が流れ込み、その後第13層によって大部分が埋没する。第9～12層は植物茎を含む層も認められるため、一定期間湿地したことが推定される。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、かわらけ、陶磁器^{てっさい}、鉄滓^{ろっかくせいひん}、木製品、鹿角製品、獣骨、モモの種子、クルミなどの自然遺物など、多種多様である。瓦はまったく見られない。とくに、第8層からはかわらけ、陶磁器が多く出土している。

かわらけは、全堆積土中から出土しているが、器形が分かるものは第8層から出土した1点のみである。口径7.8cmで、口縁部の半分ほどが内外面とも煤けており、灯明皿として利用されている。17世紀頃に位置づけられる。陶器は第8層などから3点出土している。うち1点は瀬戸美濃の天目茶碗で、16～17世紀前半に位置づけられる。他に肥前の染付磁器皿がある。鹿角製品は、一端を環状に加工した装飾品と板状の小片がある。鉄滓は第8層からの出土である。また、加工痕のある木材片が出土している。

溝 跡 地山面を確認面として2条検出された。いずれも、幅40cm、深さ20cm程度で、並行して南北方向に延びる。堀跡より古く、中世段階で機能していた可能性がある。

柱 穴 トレンチ北壁の観察で、4個（遺構4～7）が柱間1.9～2mの間隔で一直線に並んで確認された。いずれも第4層から掘り込まれている。径45～55cm、深さ75～80cmを測り、一部では柱材が良好な状態で遺存していた。これら素掘りの柱穴は、掘立柱建物跡を構成する柱穴と想定され、掘方の上面では熱の影響による赤変が認められた。トレンチ内に検出された遺構10～12・14についても、遺構4～7と埋土が酷似する。

遺物は、遺構6から土師器片1点、遺構10からかわらけ1点、遺構14から弥生土器2点と土師器2点が出土している。

ピ ッ ト 平面形はほぼ円形となるが、直径20～30cmと40～55cmの2分類できる。遺構8・13・15の深さは約10cmと浅く、堀を掘削する際に削られて底面のみ遺存している可能性も考えられる。トレンチ壁面の観察から堀跡(遺構1)より古い。遺構9は平面が36～57cmの楕円形で、深さは10cmほどである。検出状況から遺構14より新しい。



図92 旧城跡地区確認調査区全景（中央凹地が堀跡）

遺 物 遺構外から陶磁器が主体的に出土している。中国産の13世紀の龍泉窯系青磁割花文碗や15～16世紀の青花、17世紀後半の肥前の染付磁器皿、陶磁器では瀬戸美濃大窯期の灰釉小皿などがある。また、軒棧瓦（第2層）や草花文が描かれた漆器碗が出土している。

ほかに、弥生土器、土師器、須恵器、硯、瓦、石器などがある。第2層出土の瓦は磐城平城に関連するものと考えられる。

小 結 本地点の調査では、南北方向に延びる堀跡と掘立柱建物跡が検出された。さらに、堀跡埋没後の盛土（第4～7層）および焼土層混じりの堆積土（第2層）が確認されている。

堀跡は、堆積土中から出土したかわらけから17世紀頃には埋没したと考えられることから、中世段階で構築された可能性が高い。また、第4～7層の盛土については、本丸跡同様に磐城平城の造成（普請）によるものであり、さらに、焼土層混じりの堆積土は、本丸跡で検出された戊辰戦争に由来する炭化物層と同様の可能性が指摘でき、掘立柱建物跡も含め、所属時期は江戸時代末と推定される。

また、弥生土器、土師器、須恵器などについては、磐城平城築城の際の盛土に混入したのと考えられる。本遺跡が立地する台地上に該期の遺跡が存在することを示す資料である。

調査区周辺は、中世の岩城氏の時代には大館城の一部に比定され、江戸時代に入ると、慶長7年(1602)に磐城平藩主となった鳥居忠政が磐城平城の築城を開始している。堀跡は、岩城氏時代の大館城に関連するもので、磐城平城築城の際に段丘基盤層とともに盛土・整

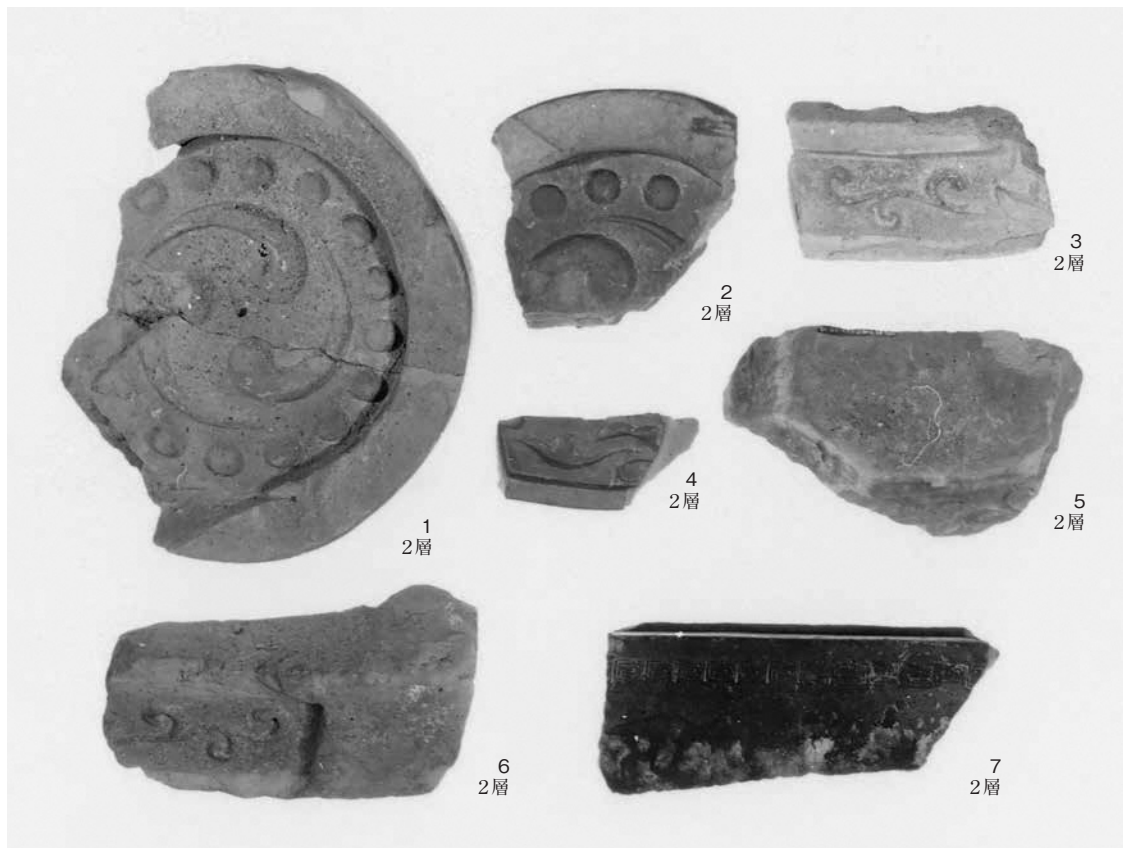


図93 旧城跡地区確認調査出土遺物 (1)

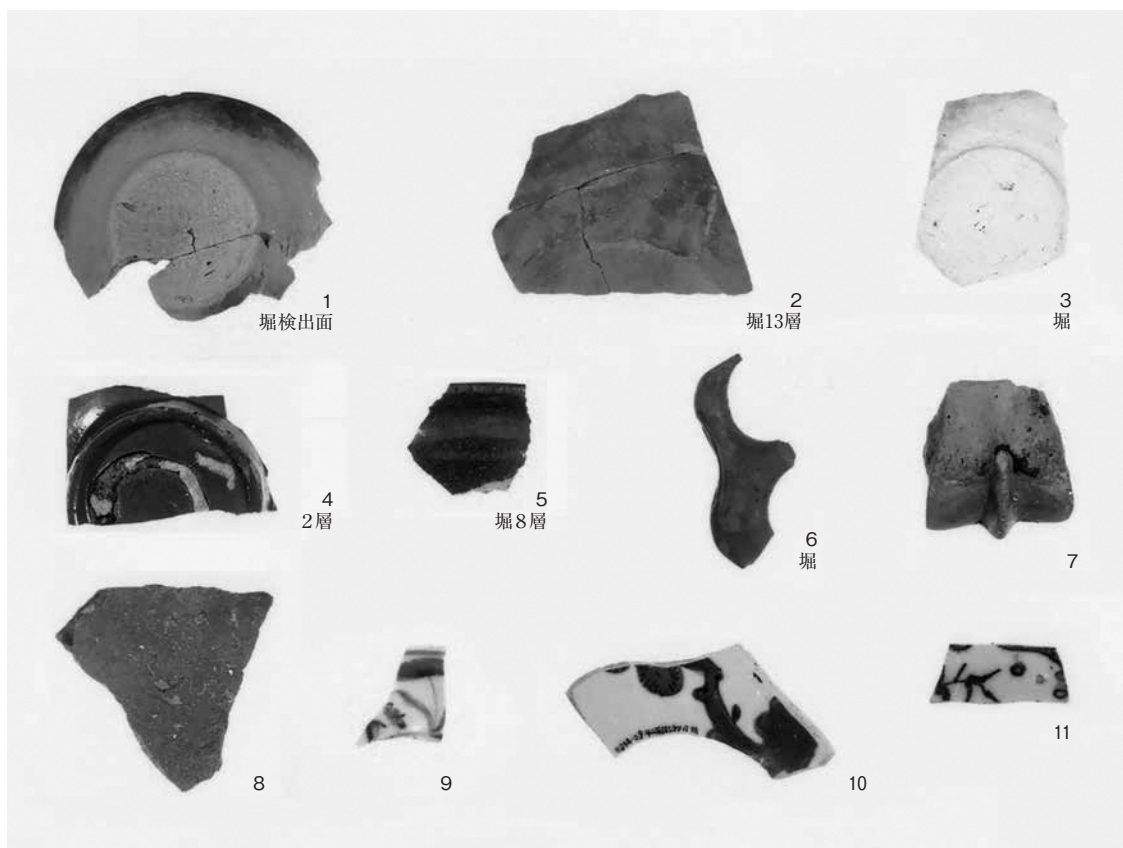


図94 旧城跡地区確認調査出土遺物 (2)

地されたものと推察される。戊辰戦争では、城内の多くの建物が焼失したが、米蔵は明治4年の廃藩置県以降に民間に払い下げられているため、消失は免れたとも考えられる。第2層の瓦を多く含む層は、米蔵等を撤去した後の整地層と推察される。

これらの成果は、中世大館城から近世磐城平城の変遷を検討する上で貴重な資料と言える。

(鈴木隆康)

(3) 内 記 曲 輪

① 六間門地区の確認調査(1)

平成17年(2005)に民間宅地開発にともない、道路敷設予定範囲に3箇所の特レンチを設定して実施した。本地点は、本丸跡のほぼ真西約370mにあつて、東西に走る六間門の大通りの東端部に位置し、大手門の手前に相当する。旧平宮林署跡地である。

1号特レンチ 10m×3mの規模で東西方向に設定した。第1層は厚さ30～70cmの盛土、第2層は厚さ30cmの暗褐色粘性土、以下は黄褐色砂礫土の地山である。

遺構は、第3層上面から土坑1基と溝跡1条が検出された。土坑は径2mほどの円形で、井戸跡の可能性が想定される。遺物は江戸時代後期の陶磁器20数点が出土している。特レンチ東端に検出された南北に走る溝跡は、幅1.2m以上、深さ40cmで、断面形態は薬研形となる。遺物は土師器2点であるが、堆積土が土坑に酷似することや位置関係から、江戸時代と推定される。

2号特レンチ 10m×3mの規模で南北方向に設定した。第1層は厚さ50～60cmの盛土、2層は厚さ20～30cmの暗褐色粘質土、以下は黄褐色砂礫土の地山である。

遺構は、土坑1基と溝跡1条、ピット10個が検出された。土坑は調査区外まで延び、平面形態は径1mのほぼ円形に近い。遺物は瀬戸美濃の尾呂茶碗と土師器片が出土している。溝跡は幅40cm、深さはわずか10cmと浅く、断面は「U」字形となる。軸線はほぼ東西に直線的に走り、調査区外に延びる。遺物の出土ないが、堆積土が土坑に酷似することから江戸時代に位置づけられる。ピットは、平面形が方形と円形の2種がある。規模は径20～35cm、深さ10cm程度と浅く、削平の影響とみられる。第2層中には縄文土器1点が混入していた。

3号特レンチ 4m×3mの規模で東西方向に設定した。第1層は厚さ30cmの盛土、第2層は厚さ30cmの暗褐色粘質土、以下は地山の黄褐色粘性土である。

遺構は、大小のピット7個が検出された。このうち、ピット1は長軸85cm、短軸60cmの隅丸方形で、江戸時代の所産とみられる丸瓦片がともなう。礎石建物の掘方と考えられ、他の同形のピットも同じ性格が想定される。

小 結 今回の調査区で検出された遺構は、その形状や遺物の時期、さらに絵図を参照すると、18世紀末葉の御用屋敷、あるいは19世紀前半の御蔵に想定される。

(高島好一)

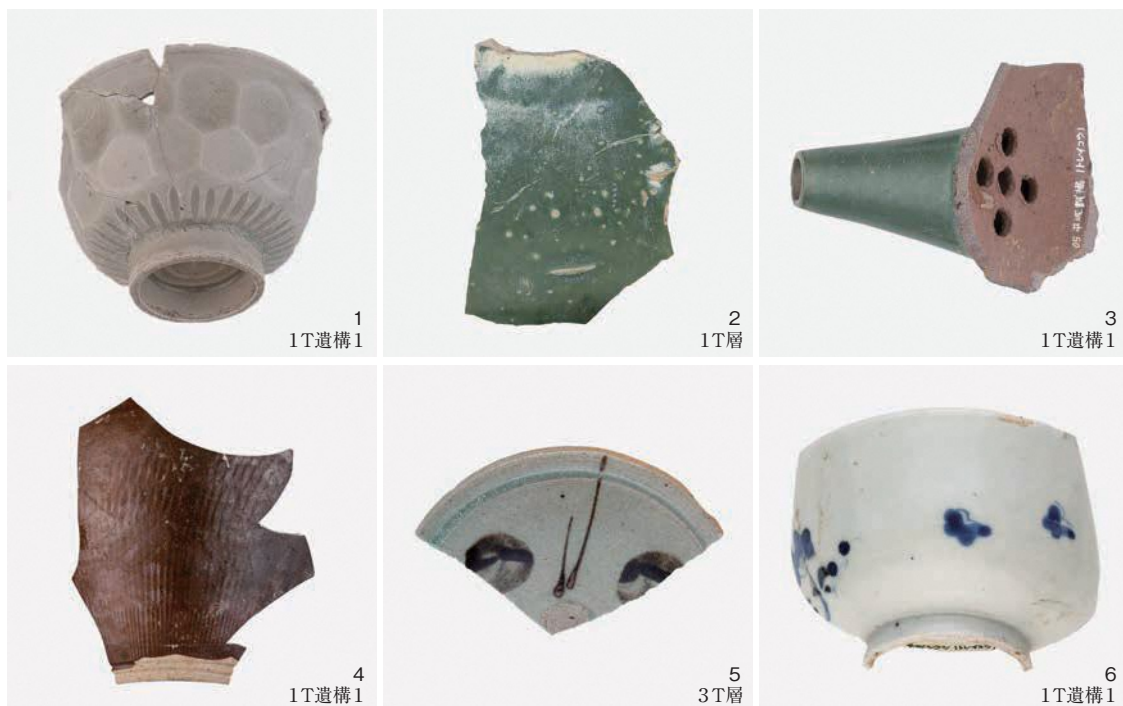


図95 六間門地区確認調査出土遺物

② 六間門地区の確認調査（2）

平成22年（2010）に個人住宅建築にともない、建屋予定範囲内に3箇所のトレンチを設定して実施した。本地点は、本丸跡から西北西に約500mの旧磐城和洋裁専門学校跡地に位置する。

1号トレンチ 対象地区東側に7.5m×2mの規模で南北方向に設定した。第1層は現表土、第2層は暗褐色土、第3層が厚さ約50cmで粒子の粗い砂質土や粒子の細かい黄褐色粘質土および5～10cm大の礫などが混在する江戸時代の整地層、第4層が炭化物を含む褐色粘質土で盛土以前の表土層となり、以下は地山の黄色粘土である。第3層から陶器が1点出土している。

2号トレンチ 対象地区北側に7m×2mの規模で東西方向に設定した。第1層が現表土、第2層がにぶい黄褐色土、第3層が厚さ約90cmで3～10cm大の礫が混在する江戸時代の整地層、第4層が炭化物や焼土が混在する黒色土である。遺構は、3層上面を掘り込んだ溝や土坑などが3基検出され、第3層と第4層の境付近から磁器とかかわけが出土している。

3号トレンチ 対象地区西側に2m×1mの規模で東西方向に設定した。第2号トレンチとほぼ同様の堆積土であった。

小 結 今回の調査区では、本丸跡同様、50～90cmの盛土による整地層が確認され、磐城平城の普請の盛土と想定される。明確な遺構の検出はなく、遺物がわずかに出土したのみである。

（檜村友延）

③ 六間門地区の確認調査（3）

平成23年（2011）に個人住宅建築にともない、建屋予定範囲内に2.7m×5mのトレンチを設定して実施した。本地点は、本丸跡から西北西約420mにあつて、東西に走る六間門の大通りの北辺に沿った宅地に位置する。調査箇所は、大通りよりも30～80cm高くなる。

第1層は表土で、均一に敷かれた厚さ約10cmの砂利である。第2層は現代の盛土とみられ、陶磁器・ガラス・金属製品・ビニール等が混入している。幕末～明治時代にかかる陶磁器や巴紋を持つ瓦片などが出土している。第3層は小礫・砂礫と粘性土が混在する整地層。第4層との間に旧表土は残っていない。南壁付近に本層を掘り込んだゴミ穴（埋土は第2層）が検出された。また、上面には瓦が散見する。第4層は砂礫や小礫が少ない砂質粘性土である。第4層下は段丘礫層の地山となるが、平坦に削平されていることから整地されたものと推測される。第3・4層は炭化物を主体とし、年代を特定できる遺物は出土していない。

本地点は、周辺における調査成果を踏まえると、第3・4層およびその直下は磐城平城の普請に関わる削平と整地層と想定される。

（高島好一）

（4）田 町 曲 輪

① いわき駅前再開発事業の立会調査

平成18年（2006）、いわき駅前地区第一種市街地再開発事業の一環として計画された駅前再開発ビルの建設にともない、立会調査として実施された。建設当時は、埋蔵文化財包蔵地「平城跡」からは除外されていた地点であったが、磐城平城絵図から外堀と武家屋敷地に相当することを考慮し、関係者と協議の上、絵図の真偽と遺構・遺物の有無、残存状況等の把握を目的として調査された。

調査の結果、絵図から想定したとおりに外堀跡が検出された。立会調査のため、遺跡全体を精査したものではなく、調査の精度も決して高いものとはいえないが、平城跡における外堀跡が初めての調査された意味は大きい。したがって、いわき駅前の市街地の地下にも江戸時代の遺構が残されていることが確認されたことは重要と言えよう。今回の調査を契機として、「平城跡」の埋蔵文化財包蔵地としての範囲は、丘陵部から低地までの広範囲に広がることとなった（図66）。

外 堀 跡 現地表面から0.9～1.2m下面から検出された。この表土などの厚さ1.0mにも及ぶ土壌には、コンクリート片や煉瓦、礫などが混在していたことから近現代の盛土と想定される。江戸時代の地表面は後世の攪乱を受けていない黒褐色粘土層が想定でき、当該期の面がほぼ手つかずの状態に残されていることもあわせて証明された。

「正保平城絵図控」（絵図1）から読み取れる外堀の上端幅はおよそ25mとされる。立会調査で検出された外堀跡は北側約13mまでの確認である。深さはおよそ2mで、堀の北側（城内側）立ち上がりはきわめて緩やかな傾斜であった。堀の基底部付近には拳大の



図96 いわき駅前再開発事業立会調査出土遺物

玉石と厚さ5cmほどの砂層が堆積している。堆積土は大まかに3層に分層され、いずれも江戸時代末以降の堆積と推定される。堀の北岸付近からは、径80cmほどのケヤキや径30cmほどのヤナギと思われる根株も確認された。

遺物 遺物は、南側に多く北側では皆無であったことから、埋没は南岸から廃棄された種々品物の投棄が大きく関係したことが想定される。

出土遺物は、総数2,677点に及び、その種類は陶磁器、石製品、金属製品、木製品、ガラス製品、自然遺体、かわらけなど多岐にわたる。なかでも、陶磁器が2,267点とその85%近くを占め、さらに96%超の遺物は堀跡の堆積土中からの出土である。

出土量の多い陶磁器でも主体は磁器で、1,999点と全体の約9割を占める。碗・皿・猪口・酒杯・徳利・段重・急須・蓮華など多種類にわたり、便器や花瓶など大型品も散見される。瀬戸美濃が主体となり、次いで肥前、さらにわずかに福良（郡山市湖南町）などの地方窯も認められた。陶器は268点と少なく、鉢・搥鉢・鍋・甕・植木鉢などの日用雑器の大型品が多い。産地は、笠間や瀬戸なども存在するが、大堀相馬が多い傾向にある。

木製品では碗や箸・桶・下駄・刷毛・遊戯具・銭杵のほか、荷札木簡や小型円板（化粧容器）なども出土している。その他の遺物についても日用品が多数を占める。

他には、ランプのバーナー部分・傘・薬瓶・硯などがある。遺物の年代については、周辺における鉄道建設工事の状況から、下限は明治30年（1897）までとすることができそうである。また、江戸時代の資料がほとんど検出されてないことは、常時、堀の清掃作業が行われていたことが推察される。

（木幡成雄）

② 並木通り地区再開発事業の確認調査

令和元年（2019）、いわき駅並木通り地区第一種市街地再開発事業にともない実施された。本地点は、磐城平城本丸跡が立地する丘陵南側の平低地に位置し、城絵図では「田町曲輪」と称されている。いわき駅西側の市営いわき駅西駐車場を調査対象範囲とし、4箇所のトレンチを設定して実施した。

調査概要 調査対象範囲南東端に位置する緑地帯に設定した4号トレンチで、明治時代以降の盛土下1.4mから、江戸時代の表土層と推測される黒褐色土が確認され、その上からかわらけが1点出土している。

また、駐車場内に設定した他のトレンチ（1～3号）では、地表面直下から明治時代以降の多量の木材や鋼材などの残材を含む盛土が厚く堆積し、コンクリート構築物も確認された。調査が深くなり下層の調査が困難であることから、江戸時代の遺構・遺物まで確認することはできなかった。

小 結 本調査区において、明治時代以降の盛土以前の地形が平坦であったと仮定すれば、盛土下には江戸時代の表土層および盛土などの遺構が検出される可能性が高い。

（末永成清）



図97 並木通り地区確認調査出土遺物

③いわき駅南口ホテル建設事業の確認調査

令和3年(2021)は、「いわき駅南口ホテル」建設にともなう工事中に一部石垣様の遺構が発見されたことが契機となり、令和3年2月に実施した。調査箇所は、JR常磐線いわき駅1番ホームまでの距離約6mというように、きわめて線路に接近する場所に位置する。対象範囲は東西約50m、南北約18m、面積は約750㎡の不整長方形で、東西軸は常磐線のホームに平行する。

1号トレンチ 調査区のほぼ中央やや北寄りに設定した。調査の契機となった石組遺構部分に相当する。石組の延長を確認するため先行掘削部分(3m×2m)を東西7.7m×南北5mまで拡張した。

石組検出面は現代の厚さ約50cmの敷き砂利の直下である。石組は2段で構成され、東西に延びることが確認された。石組は花崗岩を素材として、間知石は面をホーム側に向けて設置されている。検出面から50cm下は埋め土、さらに下方は湿地化した暗茶褐色の堆積土で、明治期の瀬戸美濃や大堀相馬を中心とした陶磁器や瓦、ガラスのほか、角材・杭・曲物・木っ端などが出土している。北側にトレンチを2.5mほど拡張したところ、基底面がホーム側に向かって緩やかに傾斜していくことが確認され、丁寧かつ堅固に積まれた石組遺構とその規模から明治期の大規模な苑池様遺構が想定された。

また、石組底面のさらに40cm下には厚さ10cm未満の砂層が認められ、陶磁器のほか瓦や木製品が出土した。陶磁器の年代は江戸期を主体としていること、また、南に設定した3号トレンチ検出の堀底の堆積土と酷似していることから、堀は常磐線のホームに向かって北側に緩やかに傾斜していることが確認された。堀底には、近世陶磁器に混じって、瓦や下駄・木っ端などの木製品・ガラス製品などが出土している。

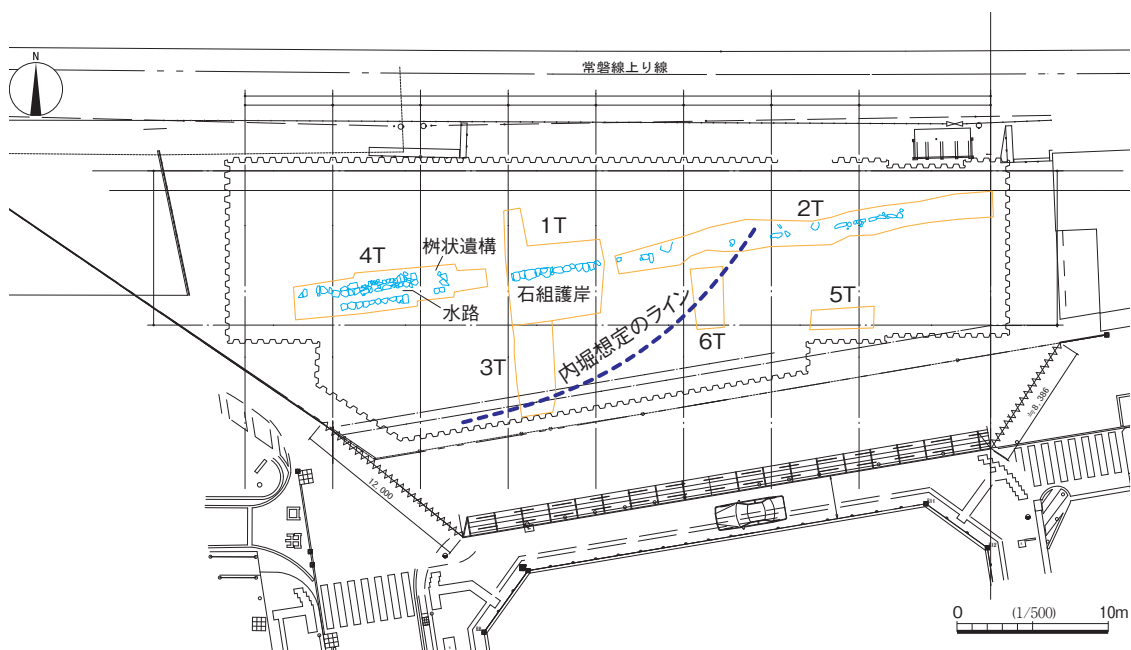


図98 いわき駅南口地区確認調査遺構配置図



図99 いわき駅南口地区確認調査出土遺物

2号トレンチ 1号トレンチ検出の石組との関連を確認するため、石組東側を長さ25.5m、幅1.5mで東西軸に延長した。

本トレンチ内の石組は1段であり、素材も加工されない自然礫を横長に組み合わせるタイプで、1号トレンチと明らかな違いが認められた。石組遺構は、随所に近現代の攪乱を著しく受けてはいるものの、トレンチ西端から約19.5mまで直線的に延びることが確認された。トレンチ東端付近では石組検出面の段階から明治期の瀬戸美濃、大堀相馬を主とした陶磁器、木製品、瓦、貝などの自然遺体のほか、皮革製品、ガラス製品などが密集して

出土し、この地点が不用品の廃棄場所として利用されていることが想定された。

3号トレンチ 調査区のほぼ中央に位置し、1号トレンチ西壁ラインを南に長さ6.3m、幅2.0mで延長した。

敷砂利下約40cmで遺構検出面となる。遺構はトレンチ南側の東西両壁に同様の位置に、45～50度の角度で立ち上がることで、検出面から遺構の底面までの深さが90cmから1mを超えること、そして基底面は平坦のまま北側に向かって緩やかに傾斜していること、さらに、出土陶磁器は基底面付近の薄い砂層にほぼ限定される特徴などから、この段階では規模の大きな河川あるいは溝が想定された。遺物は、肥前・瀬戸美濃・大堀相馬・唐津などの陶磁器、漆器・下駄のほか角材・杭などの木製品、瓦、そしてガラス製品がある。陶磁器の所属時期はおおむね江戸期に限定された。

本遺構の南の立ち上がりの位置を磐城平城の絵図と照合したところ、「内堀」が最も南に張り出す位置と考えられることや基底面出土の江戸期の陶磁器の年代から、本立ち上がりは磐城平城の内堀跡南岸に相当するものと判断された。

内堀の普請直前の盛土整地層からは江戸期の陶磁器が出土し、壁面の土層観察から堀は幕末以降に埋められていることも確認された。「ラトブ」地点の調査成果(外堀跡)に加え、堀の普請から廃絶までを追える地点として、調査対象区域周辺はきわめて重要であることが判明した。

4号トレンチ 1号トレンチの石組遺構の西方の様相を知るため、調査区の西側に長さ13m、幅約2mで東西軸に設定した。

西側では1号トレンチの延長上に位置する石組遺構が、間知石^{けんちいし}の面を相対する形で2列確認された。列間には拳大から人頭大の段丘礫が平坦に敷き並べあり、暗渠^{あんきょ}のような水路が想定され、少量の陶磁器・瓦・レンガなどが出土している。本石組遺構は延長約8mまで確認されたが、東端部では石組を構成しない部分があり、一辺1.5m四方の枳^{ますじょう}状の水溜め状遺構が想定された。検出面からは少量の陶磁器、レンガ、ガラス片などが出土している。

5号トレンチ 2号トレンチのほぼ中央から南4mの位置に、長さ4.3m、幅1.3mで東西軸に設定した。

現代の敷砂利下には近世と考えられる50cmの盛土がある。旧表土もなく、地山面の上に盛土され、トレンチ南壁では盛土層下から柱穴が1個検出された。西側の6号トレンチ土層堆積状況と合わせると、内堀築造以前(中世末葉頃)の遺構と判断される。柱穴の規模は、径30cm、深さ40cmを測る。

6号トレンチ 2号トレンチの南西1m、5号トレンチの西方6mの位置に、長さ6m、幅2mの南北軸で設定した。

厚は55cmの敷砂利直下に遺構検出面が確認された。遺構はトレンチ西壁と北壁にあり、緩やかに立ち上がる。壁面観察から、ここでも遺構の造成前に盛土整地(厚さ約70cm)が確認された。この立ち上がりは3号トレンチ検出の内堀の立ち上がり(南岸)と同一と考えられ、両者を結ぶとやや南側に膨らんで弧を描くことから、絵図で見る内堀最南端部に相当する可能性が一段と高くなった。